国際協力の憂鬱：グァテマラの治安と募る虚無感

紆余曲折ありながらも，とりあえずは順調に思えたグァテマラでの暮らしだったが，劣悪な治安と業務の虚しさが次第に私の心身を蝕んでいった。今回はその一部を紹介したい。

1. グァテマラの治安

グァテマラでは内戦が長く続き，1996 年 12 月にようやく和平合意がなされた。私が赴任したのはそのわずか 6 年後であり，国は多くの問題を抱えていた。もっとも深刻な問題は治安の悪さである。人口 100 万人ほどが暮らす首都（写真 1）では，一日当たりおよそ 10 人が銃によって殺害されていた。赴任前にもこの手の話は何度も聞いていたが，どこか他人事のように感じていた。しかし，グァテマラに赴任した直後に，歓迎会で仲良くなったばかりの JICA 事務所の運転手が，バスでの移動中に銃殺された。歓迎会からわずか 2 週間後のことだった。これを機に，犯罪に巻き込まれるのは確立の問題であることを実感し，できるだけ危険を回避するように心掛けて行動するようになった。

写真 1. グァテマラシティーの市内.

強盗やスリなどの被害は枚挙にいとまがない。実際に強盗被害にあった知人は，「被害届を警察に提出すると，警察官から窃盗団に情報が伝わって報復を受けるため警察には相談できない」と話した。加えて，「かといって何もしないでいたら，家に強盗が 3 度も押しかけ，その都度，家財一式を盗られた。中には祖母の形見があり，それが盗られたのが悔しくてならない」と苦痛の表情で回想してくれた。別の友人は，「警察官の目の前で強盗に銃を突きつけられてバックを盗られたが，警察官はそのようすを見てただ笑っていた」と言う。警察はあてにならない。当時は約 2 万人の警察が在職していたが，その数が足りていないとともに，給料が低くいことから彼らの労働意欲は著しく低かった。

グァテマラでは，ほかにも内戦中に土地を奪われた先住民たちによる農地要求や，内戦時に政府が反政府を鎮圧するために雇った自警団に対する給料未払い問題，教員の賃金交渉などによって，毎週のように各地でデモが繰り広げられていた。経済面や教育面，保健衛生面での問題も看過できず，これらが原因で貧富の格差が生じていた。貧困問題に対して，当時のグァテマラ政府は貧困削減戦略を発表したものの，総論のみで具現化されなかった。政府といえば，内戦の混乱に大きく関与した政党が与党となっており，汚職問題や増税もあいまって大統領の“不支持率”は 94%を超えていた。これがグァテマラの現実であり，一般的な日本人の想像をはるかに超えていた。

なお，現在の治安はさらに悪化していることを付記しておきたい。外務省 HP にも 2012

年の殺人事件は 5,155 件とある。こうした実情を踏まえ，赴任中の留意点を下記に示す。臆病は恥ではない。せめて外出を怖いと感じてほしい。海外で暮らす方の参考になれば幸いである。

・夜間時の外出は避け，日中でもひと気のないところへは立ち入らない
・強盗と遭遇した際は自分の命を最優先にし，物や金は素直に渡して強盗の顔は見ない
・強盗に渡すため捨て金（3 千円程度）を常にポケットに用意しておく
・財布は持ち歩かず，現金はパスポートとともに腹巻に入れる
・盗まれて困るものは持ち歩かない
・周囲の人が強盗にあっても関与せず，冷静に身を隠す
・誘拐やひったくりを想定して，車道からできるだけ離れて歩行する
・10m に一度は後ろをさり気なく振り返って安全を確認する
・バス乗車時にドア付近の席は避け，なるべく真ん中に乗り，寝ない
・バス等の車内では，荷物は棚にあげず手元におく。ただし，持っていかれそうになったら迷わず荷物から手を離す
・車両は，信号が赤でも進入するし，ウィンカーを出したまま直進してくる

2. 業務に対する虚無感

写真 2. 馬で移動するマツ林のフィールド調査.

熱帯に位置するグァテマラは，カリブ海に面する熱帯雨林から標高 4,000m を超える高山帯まで多様な植生を有している。なかでも低海抜域の熱帯域には豊かな自然が残されており，未知なる植物がいまだ多く存在する。しかし，不幸なことに，こうした人為的干渉の少ない地域のほとんどは JICA 安全管理課によって立ち入り禁止区域に指定されており，職種が「植物学」であっても，協力隊員が現地へ赴くことは許されなかった。すぐ手の届くところに宝の山があるのに辿り着くことができず，地団駄を踏んで悔しがった。

それでも，はじめの 1 年間は，安全が認められる範囲内で同僚に誘われて野外調査に出かけていた（写真 2，3）。しかし，任期途中から大統領との接見する協力隊イベントが入るなどして，調査のタイミングが合わなくなった。そして，事態はさらに深刻化し，職場の同僚から調査に一切誘われなくなった。この事の顛末を以下に述べる。

写真 3. 小舟に乗って植物採集するマングローブ林調査.

赴任して 1 年目を迎えた頃, 勤務先の職場からの要請で JICA の経費を使って実体顕微鏡（およそ 60 万円）を導入した。この申請にあたり, 職場は一銭も出せないというので, JICA スタッフの助言もあって「顕微鏡購入の交換条件として，今後の調査費を同僚たちに負担させる」ということにした。このときは同僚も顕微鏡が欲しかったため気前良くサインした。しかしながら，その後は同様の調査に行く際に「君は次の機会だ」と言われるようになり，次第に声も掛けられなくなった。調査費を負担してまで調査に同行してもらわなくても結構と思われていると同時に,「当てにしているのはボランティアの労力ではなく，金だ」と言われているようで悔しかった。

加えて，職場には通常誰もおらず，日を追うごとに業務に対する虚無感が募っていった (写真 4)。同僚は気分の良い時だけやってきては，彼の友人達とギターを弾きながら騒ぐだけ騒いですぐに帰ってしまう。そうして，自分がここでやっている仕事は何のためだろう？危険を冒してまでする必要があるのだろうか？と懐疑的になり，虚無感だけを職場に残して家路に着き，また虚無感に浸りに職場へ赴くような生活に変わっていった。そうした虚しい日々を過ごすにつれ，さすがに疲れを隠せなくなってきた。任地変更を JICA スタッフに何度も訴えたが，その度に「今の職場がベストだ。辛くてもただいればいい」と突き返された。そしてとうとう，2 年間の任期満了まであと 2 カ月に差し迫った頃，過剰のストレスを感じて身体の免疫力が低下しきったところに薬の副作用によって引き金がひかれ，全身に発疹が出て入院する羽目になった。

写真 4. 誰もいない職場.